

(2014年12月24日講演)

7. 100年先が見える工場づくり—自然との共生—

石坂産業株式会社代表取締役 石坂典子委員

皆さんは、環境問題に強い関心がおありと思うが、産業廃棄物の中間処理の現場を見学に行かれたことはあるだろうか(大多数が挙手)。

さすがである。やはりこういった研究会であるから、皆さん見に行かれています方が多いと思うが、大抵の大人の方に、産業廃棄物、中間処理を見に行かれたことがあるかと聞いて、行ったことがあると行ってくださる方はほとんど皆無に近い。

では、そうした人たちに産業廃棄物のイメージはどのようなイメージかと伺うと、きつい、汚い、危険といったいわゆる3K的なビジネスで、かつ地域を汚染するような印象をお持ちになっている方が多い。今でも、処理場建設は全国的に反対運動が起きているような状況であり、いわゆる迷惑産業という位置づけになっている。

ただ実際、皆さんにここで私と一緒に考えていただきたいと思っっていることがある。例えば墓を立てるといったときに、お父様やお母様が亡くなったときの墓をあまり遠くに立てたいと思われる方は少ないと思う。ところが、知らない人の墓が家の近くにならないうと、さあ、反対となる。これは、墓がごみに見えるということではないかと思っっていて、この迷惑産業という位置づけを、どうやったらいわゆる長期的ビジョンできちんとしたビジネスとして把握していただけるかということを考えている。

私どもの会社は、130名ぐらいの社員がおり、創業47年目である。私の父親が創業し、私が二代目社長である。皆さんも多分ご存じだと思うが、1990年のときにダイオキシンの報道があった。日本は世界で最も焼却が多い国であると報じられたが、国土が狭いから焼却に頼らざるを得ない、焼却炉が乱立しているという意味で大国である。

資料の2ページをご覧いただきたい。ダイオキシン問題を扱うマスメディアの報道によって、当社は大変なバッシングを受けた。いわゆる地域にあってはならない業界であるということで、出ていけという大きな反対運動が起こった。そのとき父は、「世の中のために良かれと思っで作った会社であるが、なぜこれほどまでに地域の人から必要とされない産業になってしまったのか、本当にこのビジネスは存在してはならないのか、地域に愛される必要性があるとすれば、100年先が見える工場は一体どのようなものなのだろうか」ということを考え、大きな目標を掲げて取り組みを始めた。世界に共通している環境問題の中に、地球温暖化、生物多様性、そして廃棄物問題がある。不法投棄の問題をいかに考えていくかということは、これからの業界の課題にとどまらず、国民一人一人の大きな課題になるのではないかと思っっている。

3~4ページをご覧いただきたい。ちなみに過去5年間の一般廃棄物の量と産業廃棄物の

量は大体、一般廃棄物 4,700 万トンに対して、産業廃棄物は約 4 億トン近くあり、戦後ずっと出続けているわけである。これらの産業廃棄物を、我々のような中間処理業者約 1 万 9,000 社弱が受け入れている。

では、そもそも中間処理業者の目的は一体何なのかということで、5 ページで軽く触れさせていただいているが、やはり焼却、破碎、つまり廃棄物をできる限りリサイクルし、プラスチック減量化していく、容積を小さくしていくということである。最終的に埋め立てする物を小さくしていこうというビジネスである。その中で現在当社は、産業廃棄物中間処理業者として、焼却はダイオキシン問題のときに地域から反対が起こったので、やめていこうということで撤退し、現在は破碎と減溶などの違う技術での取り組みをしており、「減量化、リサイクル化率」で、現状 95% ぐらいを達成した状況である。

本日、皆様の手元に発行したての本『絶体絶命でも世界一愛される会社に変える！』を置かせていただいた。この中で、石坂産業が一体何を目指してきたかをつらつらと書いているので、時間があれば見ていただければと思う。また、音楽祭が明日行われるのであるが、お配りしたパンフレットの中に武蔵野の里山についても触れているので、時間があれば、これも読んでいただければ大変うれしい。

6 ページをご覧ください。実際不法投棄の件数を見ていただくと、やはり国の政策や各都道府県の対応が非常に素晴らしくて、大規模不法投棄はどんどん減少してきている。突出しているところもあるが、本当に大規模な不法投棄が行われてしまった時期があり、このころから廃棄物の搬出事業者の責任などが厳しく問われるようになったので、状況が変化してきている。

7 ページは不法投棄の大体の中身である。特に全体で見たいのが、建設系の混合廃棄物、木くず（建設系）、がれき類である。これらは、どちらかという建設に伴って発生する物と解釈していただければよいが、およそ全体の 7 割が建設系の廃棄物の不法投棄で占められているのが事実である。我々が特化して取り組んでいるのは、建設系廃棄物のリサイクルである。産業廃棄物の焼却をやめたときに事業転換を図り、これらの受け入れを始めた。

私が社長になったのは、父親に社長をやらせてくれと 31 歳のときに頼んだときからである。父からは「女性では無理、業界を見れば分かるだろう」と言われた。運転手たちは結構、強面な人が多いものであるから、そのようなところに入りしている運転手を相手にして商売していくのは簡単ではないと言われた。しかし、廃棄物は一体誰がどこで片付けられればよいのだ、最終的にどこで埋め立てられることが理想なのだとすることを考えて社長になる決意をした。

多くの人たちは廃棄物のことを知らない、いわゆる無関心である。だが、近くで処理されると、「やめてほしい、反対、臭う」など、いろいろな苦情が起り、全国的な問題に発展する。こうした中で、我々業界としては、どうやってスタンスを変えていけばよいのか、いろいろな視線をやはり思い切って変えていく必要があるかと思ひ、私が取り組んだこと

は 2 つある。一つは人材教育である。脱産廃屋。産廃屋と言われたいような社員がそろそろ会社になればいいと思ったこと。もう一つは、全天候型のプラントにしたかったということである。

8 ページの写真にもあるような建屋でプラントを覆うということをした。今でも、産業廃棄物処理会社は露天で営業することが OK になっているが、わざわざ設備投資をして建屋の中に入れた。中で廃棄物を処理するわけであるから、ほこりがたくさん舞うわけである。それを一台 7~8 千万円もする大型集塵機を 7 台入れて、一日中稼働している。それこそ、電気代が月当たり 4~5 百万円もかかるようなイメージになってくるわけである。建屋にあえて入れなくていい廃棄物を建屋に入れて処理していくというのはナンセンスだと、ちょうど 8 年ぐらい前にこれを導入したとき、同業者の社長さんたちに笑われた経緯があった。しかし私としては、この業界のビジネスとして、地域に対してどのようなことができるのかと考えたときに、世界に共通している環境問題に、一事業者としてできる限り取り組んでみる必要があると思った。

地球温暖化に対して、会社はどのようなことができるかなどを考えてみた。プラントの屋根に当たった水を全部回収しておけばまたリサイクルで水が使える、屋根を架けてしまうと暗くなってしまいが、明かり取りを後から付けて、日中は電気を使わなくてもプラントが明るく照度が保てる、建物の上に 200KW の太陽光発電を乗っけるなど、環境改善努力を重ね、自分たちができる限りのことに全部取り組んでみようと思った。我々が動かしている重機が 20~30 台あるが、そのうちのメイン重機は全部電気で動かす仕様である。電気重機というのは、インシャルコストが通常の重機の倍かかる。やはりそこまでして本当にやる必要があるのかと問われることもあるが、どのようにしたら、我々のビジネスが周囲に受け入れてもらえるかを、一つ一つ潰して取り組んできたのである。

次に、生物多様性ということ考えた場合、我々にどのようなことができるのか。例えば自分たちの出している CO₂ について、地域の人たちにどのように利益還元することができるかと思ったときに、たまたま地域、会社の周辺を見回してみたら、そこが 300 年以上も昔から続く伝統の農業があったので、それに目を付けた。三富という五代将軍綱吉の側用人であった柳沢吉保様の領地である。その里山が崩壊していき、荒廃化していつている。荒れ地になったところで何が起きているかということ、やはり不法投棄が起きてきていた。その不法投棄されたごみを我々はボランティアとして片付けながら、一体何がこの原因になっているのだろうと考えた。汚いところは汚くてよいという感情が湧いてしまうのではないか。ならば不法投棄したくないような環境を作り出そうということで、里山再生プロジェクトを立ち上げ、東京ドームおよそ 3.5 個分の面積であるが、それを我々の力で萌芽更新に努め、森を明るくしたり、また、植樹したりというようなボランティア活動を、地域の人たちの土地をお借りしてやるようにした。

このような生物多様性の回復の取り組みをした結果、工場が占める敷地面積の割合は、全体の 2 割ぐらいしかなく、8 割が緑地になっている。工場法で言うと、2 割が緑地で 8 割

が工場というのが一般的であるのに逆だという話で、そのようなところも面白い会社という事で最近注目していただけるようにはなっている。

本日のお話のポイントとして、建設系の廃棄物を詳しく見てみたい。皆さんが30年、40年住んだ住まいを取り壊して発生したときの材料を我々が受け入れる。もう取り壊された物であるので、ほとんど色がない。ほとんど茶色というか、グレーというか、本当のごみ。必要で皆さんがまだまだ使えると思っているような物はすべて抜き取られたものが我々のところに入ってくるので、ほぼ価値のない状態である。実際に住まいの廃棄物だと、廃棄物に名前が書かれていない。焼却していたころは、商品を見たらどこのメーカーかすぐ分かってしまう。トレーサビリティという観点から、自分たちの商品はきっちり処理していこうということで、大分処理に対してうるさくなっているが、建設系の廃棄物が発生するのは30年、40年後であるから、壊す業者と、建てたメーカーとは全く別のところになったりする。また、家を壊すのに何百万円も払うのはもったいない、もっと安くならないのかという感覚になるのが普通なので、皆さんは坪当たりの単価の安い業者を探すであろう。

そうすると、我々の業界では、廃材が少ないときはダンピングして廃材を取り合うというようなことが起きて適切な処理ができなくなる。職人たちの人夫代を自分たちのコストの中に入れてしまうと、あと残ったものがごみの処理代金になってくるから、ごみの処理代金が高い業者には出せないことになる。では、どうするのかと、どこかへ捨ててしまえばよいのではないかということで不法投棄のようなことが起きてしまうわけである。

我々は廃材を一度全て受け入れたあと、徹底的な手選別と機械選別、そして重機選別を入れて処理していくが、山積みになったものは一体何かというと、家を全部取り壊して行って、最後は更地としてきれいな土壌に戻すと思うが、そのときに、すき取って発生した土のごみである。これが不法投棄の中で一番多いごみであるが、当社はこの受け入れを本体事業のメイン事業にしている。9ページは、それをさらにクローズアップした写真であるが、皆さんもどこかで見たことがあるような廃棄物になっていると思う。こういった物をどんどん細かく処理していく。

実は、東日本で今こういったリサイクルをする会社は3社か4社しかないと言われている。ほとんどの廃材は、ごちゃごちゃのごみの状態で埋め立てされている。何とか、これを、ごちゃごちゃの状態で最終処分場に埋めないで、また自分たちの生活の範囲の中に戻せないかというのが、我々が本当に目指している循環ビジネスであり取り組んでいるところである。

この土分にプラスの価値を付けていくために、横山委員などにもご協力いただいて、これから大きな研究テーマにしていこうかという考えもある。また、路床材と言って、路盤の下層に埋めるような形で第三者認証を受けている最中でもあり、来年の1月ぐらいに最終審査を受ける予定になっている。これがしっかり審査を通ると、道路工事で国交省が使っても問題ない材質のリサイクル材ということで認定されるようになるので、これは日本の廃棄物処理の事情を変えていく大きなきっかけになっていくのではないかと考えている。

私たちのビジネスは商圏の範囲が決まっており、地場産業ということになる。50km 圏が範囲で廃棄物が持ち込まれてくる。関東では、もちろん発生する廃材は、東京都が圧倒的に多くなっているのです。どうしても千葉、埼玉、神奈川に我々のような業者が乱立するような仕組みになっている。以前、環境団体のある方が私に、「当地域に入ってくる廃棄物のうち、半分は都心のごみではないか」と言われた。だが、誰かが処理しなくてはいけないと思うので、「では、どこで処理されるのがよいと思うか」と問い返したときに、その方は、「そのようなことは知らない、例えば長野県でも北海道でも持っていけばよい」と言われた。これを長野県や北海道の方が聞いたときにどう思うだろうか。こういった考えが、現状最終処分になかなか立地条件を付けられない要因になっているのではないかと。

なお、私も、廃棄物処理を多くの人に知っていただきたいとあって、工場見学ができるように、2億円近くを追加投資して工場見学通路を作った。最初のうちは本当に来てくれる方がいなくて、興味を惹かなかった。ビールや化粧品製造であると、「ああ、私たちが普段使っている物はこうやって造られている」と実感され、安全・安心だと確認されると商品が売れていく。ところが、我々のようなところに皆さん見に来られても、何も得られるものがない。持ち帰れる廃棄物、そのようなものはおかしいし、ただ見るだけという形になるから興味を惹かないのである。では、どうやったら興味を持っていただけるかということで、私たちの持っている森、里山を子供たちの教育の場として提供していこうということを試みた。持続可能な教育とは、京都議定書の中で言われている体験することである。それを体験する認定の場は環境省や文科省の推奨で出されていると思うが、私たちの里山も、この体験機会の場の認定を頂いている。子供が集まると大人も集まるという仕組みが徐々に広がり、今は全国で和歌山県を除いて、すべての県の環境研究の方たちが団体様で来てくださるような会社になった。皆様の中で、和歌山県に、もしお知り合いの方がおられたらお誘いいただければと思う。

私は、見てもらうことで「石坂産業はすごい」などと言ってもらいたいとは思っていない。見てもらうことで、「もっとこうしたら、さらによい」というアイデアを頂きたい。どういう会社だったら地域にあっているのかという言葉も頂きたいと思っている。普段見られることのない我々のような会社で働く社員が、多くの人たちに見られることによって、働きがい、やりがい、そしてこの仕事の価値や誇りを見出すことができた。それによって産業廃棄物処理会社でありながら、おもてなし経営企業選という経産省の賞も頂いて、また、埼玉県のおもてなし事業所大賞も頂いた。我々のような3Kと言われていたようなビジネスでも、周りから評価されるような環境を作れるのだということを知ってもらうことで、我々の業界にいい刺激が与えられた。

自分の会社を悪くしようと思っている社長はおられないので、見に来たら、何か真似しようということで、我々の取り組みの一つ二つを持ち帰っていただける。そうすることで世の中全体が良い方向に向いていくチャンスになるのではないかとあって、現在も取り組んでいる。

今、地域の方たちとヤマユリクラブというサークルを持っており、大体 3,000 名弱ぐらいの地元の方たちに登録していただいて、里山を守る取り組みをしている。年間、3,000 万円ぐらいの経費がかかっているが、なかなかそのように思っただけでない。森を守るのにそんなに金がかかるのかというようなイメージを持たれるが、やはり下草を定期的に刈ったりであるとか、大木を切ったり、また、新しい植樹をしたり、そういった生態系を管理するのに人件費等がかなり嵩んでいて、こういった森作りを地域の人たちと一緒に考えていこうということで作ったのがヤマユリクラブである。ヤマユリの花が好きだからヤマユリクラブではなく、森田オブザーバーが、もともと農家が手入れをされていたこの森にはヤマユリが群生していたというようなお話をしてくださったのが発端である。今は、ほとんどヤマユリを見ることができなくなって、これを再現できるような里山にしようということでヤマユリクラブと付けさせてもらったものである。時間があつたときにまた見ていただければと思う。ありがとうございました。